



さゆりっ子

「一人で持ちたいの!」

片付けようとしていたものをお友だち（Yさん）と取り合いになったAさんと保育士とのやりとりの記録です。

Aさん：だってAさ、あんまり筋肉もってないしー、
1回置いてYくん！置いて、離してYくん！手離して！
だってA、最近そんなに筋肉もないし、柔らかいからー…
それでA、1人で持ちたいからー！

保育士：だれが最初に持ってたの？

Aさん：ううん…Yくん。
でもー、Aー、筋肉なくなっちゃってー、重いものが持てなくなっちゃうの一人で！
（声を出して泣く）

保育士：そうなんだね。じゃあ、YくんはAくんと一緒に持ちたいみたいだから、一緒に持って筋肉モリモリしたらどう？

Aさん：でも嫌だの!だって!

保育士：YくんもAくんが一人で持ちちゃったら同じ気持ちだよ。

Aさん：でもさ、そうしたら軽くなっちゃってまた筋肉が持たなくなっちゃうよ、生き残れなくなっちゃうよ!

保育士：一人で持たなきゃいけないの？

Aさん：うん!そう!

保育士：どうして？

Aさん：だって、ママやパパが持ったものは、えっとー、持っているものはー、でもいつもAはー、えっとー、いつもえっとー、人生ゲームでー、なんかきるやつのお兄ちゃんとパパとママだけやって、Aはまだ無理なのかな？Aはまだ早いのかな？（声を出して泣く）

保育士：人生ゲームができないから一人で持ちたいの？

Aさん：うん、そうなの!（声を出して泣く）

保育士：そうなんだね。人生ゲームができないことは、おうちでお話したらいいんじゃない？

Aさん：でもAはいつもダメなことをしているからいつもできなくなっちゃうの!
（声を出して泣く）

<続く>

自分の思いを独自に展開していくAさんと、何とかYさんと一緒にお片付けができるようにしようと説得を試みる保育士とのやり取りの様子が想像できるかと思えます。

「Yくんも片付けたかったものを一人で片付けようとしていること、そのことで二人とも悲しい気持ちになっていること」をAさんと共有しようと質問をするがその都度Aさんの気持ちが返ってくる。そして、声を出して泣くAさんからは、感情的になっているようにもうかがえる。

「Aさんの話に付き合わずに、『今は筋肉の話ではありません。』とぼつさり切ってしまった方がいいのでは…」との考えもある。どう折り合いをつけるか、考えてみる機会にしたいのであるならAさんの気持ちを落ち着かせながら話を進めるという支援の方法にもなるかと思えます。

「Aさんのお話を聞いていると思いつきで話をしているようだが、『自分のことをどうしてわかってくれないの!』と主張を繰り返している。人生ゲームでの『Aはいつもダメなことをしているから…』はAさんの本音なのかな?こんなときAさんを追い込むような言葉はなかなか心に響かないのでは?とにかくAさんの気持ちに寄り添う言葉がけに徹してみたらどうかな?」

「こうなったときはいつそのこと、さっと通り越して『Yさん、譲ってくれてありがとう』とAさんと一緒に感謝の言葉を伝え、自分のまわりのお友だちへの見方を耕していくのはどう?」

様々な支援が浮かんできます。「子どもの主体性を大切にする保育」に迫ろうとすると悩む場面が出てきます。「正解はない」のですから「少しでも子どもの気持ちに寄り添った支援にしていく」ことが大切です。『「無意識の管理主義」が優先されていないか』という意見に「NO!」とはっきり言いたいものです。

「倫太郎ちゃんはトンネル遊びが好きだよね」
倫太郎はもうひとつ、こつくりと首をひねった。
「お母さんのお迎えが遅くなったとき、倫太郎ちゃん、ひとりでたくさん、トンネルを掘ったもんね」
倫太郎はうなずく。
「あのときも、おしまいにトンネルをみんな壊しちゃった。わたし、見ていたんだ。倫太郎ちゃんは、とても楽しそうだった。倫太郎ちゃんはトンネルをつくるのも、壊すのも好きなんだ。そうでしょう?」
倫太郎はあごを引き、ちよつと威張った感じでうなずく。
「倫太郎ちゃんがひとりでトンネルを掘って、そして壊しても誰も何にも言わなかったのに、みんなで作ったトンネルを壊したときには、文句を言われちゃった。そうよね。倫太郎ちゃん」
倫太郎は少し考えて、それからこつくりうなずいた。
園子さんはそのことについて、それ以上、何も言わなかった。
「倫太郎ちゃんはこれからトンネルを百、作るかな、千、作るかな。一万かな。それから、トンネルを百、壊すかな。千、壊すかな…。」
園子さんは楽しそうに言った。
元氣を取り戻した倫太郎は、
「あのね、あのね。一万がね、三十個オ」と目をキラキラさせて言った。

灰谷健次郎さんの小説「天の瞳」に出てくる一節です。砂場のトンネルを壊された子どもの「告げ口」をきっかけに、担任が園長の園子先生のところへ倫太郎くんを連れてきた時に交わした会話です。

この時の二人の立ち位置を想像してみてください。私は園子先生の前に立っている倫太郎くんが浮かんできました。でもこの小説では園子先生は倫太郎くんの横に並んで座り、語りかけているのです。きっと遊びつくした園庭を目の前に静かに語りかけているのでしょう。勉強になるシーンです。